

5-HT<sub>3</sub>受容体拮抗型制吐剤

劇薬  
処方箋医薬品<sup>※</sup>

グラニセトロン静注液1mg [AFP]  
グラニセトロン静注液3mg [AFP]

(グラニセトロン塩酸塩注射液)  
Granisetron

	1mg	3mg
承認番号	21900AMX00399000	21900AMX00398000
薬価収載	2007年7月	2007年7月
販売開始	2007年7月	2007年7月
効能追加	2012年5月	2012年5月

貯法：室温保存  
使用期限：外箱及びラベルに表示

注)注意－医師等の処方箋により使用すること

【禁忌(次の患者には投与しないこと)】

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【組成・性状】

	グラニセトロン静注液1mg [AFP]	グラニセトロン静注液3mg [AFP]
有効成分	1アンプル(1mL)中 グラニセトロン塩酸塩1.12mg (グラニセトロンとして1mg)	1アンプル(3mL)中 グラニセトロン塩酸塩3.35mg (グラニセトロンとして3mg)
添加物	クエン酸水和物・・・2mg、 等張化剤、pH調節剤	クエン酸水和物・・・6mg、 等張化剤、pH調節剤
性状	無色澄明の液	
pH	5.0～7.0	
浸透圧比	約1(生理食塩液に対する比)	

【効能・効果】

抗悪性腫瘍剤(シスプラチン等)投与及び放射線照射に伴う  
消化器症状(悪心、嘔吐)

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉

- 本剤を抗悪性腫瘍剤の投与に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)に対して使用する場合は、強い悪心、嘔吐が生じる抗悪性腫瘍剤(シスプラチン等)の投与に限り使用すること。
- 本剤を放射線照射に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)に対して使用する場合は、強い悪心、嘔吐が生じる全身照射や上腹部照射等に限り使用すること。

【用法・用量】

抗悪性腫瘍剤(シスプラチン等)投与に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)

成人：通常、成人にはグラニセトロンとして40 µg/kgを1日1回静注又は点滴静注する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、症状が改善されない場合には、40 µg/kgを1回追加投与できる。

小児：通常、小児にはグラニセトロンとして40 µg/kgを1日1回点滴静注する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、症状が改善されない場合には、40 µg/kgを1回追加投与できる。

放射線照射に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)

通常、成人にはグラニセトロンとして1回40 µg/kgを点滴静注する。なお、年齢、症状により適宜増減する。ただし、1日2回投与までとする。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉

- 本剤を静注する場合は、緩徐に投与すること。
- 放射線照射に伴う消化器症状に対して使用する場合は、放射線照射前に点滴静注する。なお、造血幹細胞移植前処置時の放射線全身照射(TBI: Total Body Irradiation)に伴う消化器症状に対して使用する場合は、投与期間は4日間を目安とする。

【使用上の注意】

1. 重要な基本的注意

本剤の投与により消化管運動の低下があらわれることがあるので、消化管通過障害の症状のある患者は、本剤投与後観察を十分に行うこと。

※2. 相互作用

【併用注意】(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
セロトニン作用薬 選択的セロトニン再取り 込み阻害剤(SSRI) セロトニン・ノルアドレ ナリン再取り込み阻害剤 (SNRI) MAO阻害剤 等	セロトニン症候群(不安、焦燥、興奮、錯乱、発熱、発汗、頻脈、振戦、ミオクローヌス等)があらわれるおそれがある。	セロトニン作用が増強するおそれがある。

3. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

※(1)重大な副作用

ショック、アナフィラキシー(頻度不明)：ショック、アナフィラキシー(痒痒感、発赤、胸部苦悶感、呼吸困難、血圧低下等)があらわれるとの報告があるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

以下のような副作用があらわれた場合には、投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。

	頻度不明
過敏症	発疹、発赤
精神神経系	頭痛、めまい、不眠
循環器	頻脈
消化器	便秘、下痢、腹痛、胃もたれ感
肝臓	AST(GOT)、ALT(GPT)上昇等の肝機能検査値異常
その他	発熱、全身倦怠感、顔面潮紅

4. 高齢者への投与

高齢者には副作用の発現に注意し、慎重に投与すること。

5. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

(1)妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ投与すること。

(2)ラットにおいて乳汁への移行がみられたとの報告があるので、授乳中の婦人に投与する場合には、授乳を中止させること。

6. 小児等への投与

(1)抗悪性腫瘍剤(シスプラチン等)投与に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)

低出生体重児、新生児、乳児に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

- (2)放射線照射に伴う消化器症状(悪心、嘔吐)  
小児等に対する安全性は確立していない(使用経験が  
少ない)。

## 7. 適用上の注意

### 調製時

- (1)フロセミド注の原液及びジアゼパム注との配合は沈  
殿が生じる場合があるので、避けること。  
(2)アンプルカット時には、異物の混入を避けるため、  
エタノール綿等で清拭することが望ましい。

## 8. その他の注意

### がん原性

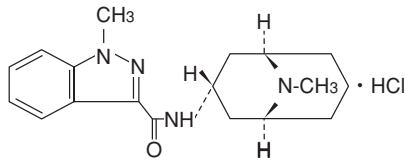
マウス及びラットに1、5、50mg/kgを2年間経口投与し  
対照群と比較した。マウスでは50mg/kg群の雄で肝細胞  
がん、50mg/kg群の雌で肝細胞腺腫の増加がみられた。  
また、ラットでは5mg/kg以上群の雄及び50mg/kg群  
の雌で肝細胞腫瘍の増加がみられた。しかし、1mg/kg  
群(臨床用量の25倍に相当する)では、マウス及びラッ  
トとも肝細胞腫瘍の増加は認められなかった。

## 【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：グラニセトロン塩酸塩(Granisetron Hydrochloride)

化学名：1-Methyl-N-(endo-9-methyl-9-azabicyclo[3.3.1]  
non-3-yl)-1H-indazole-3-carboxamide  
hydrochloride

構造式：



分子式：C<sub>18</sub>H<sub>24</sub>N<sub>4</sub>O · HCl

分子量：348.87

性 状：白色～微黄色の粉末又は塊のある粉末である。  
水に溶けやすく、メタノールにやや溶けにくく、  
エタノール(95)に極めて溶けにくい。

## 【取扱い上の注意】

### 安定性試験<sup>1)</sup>

最終包装製品を用いた加速試験(40℃、相対湿度75%、6  
ヵ月)の結果、グラニセトロン静注液1mg「AFP」及びグラ  
ニセトロン静注液3mg「AFP」は通常の市場流通下において  
3年間安定であることが推測された。

## 【包 装】

グラニセトロン静注液1mg「AFP」：5アンプル

グラニセトロン静注液3mg「AFP」：5アンプル

## 【主要文献】

1)大興製薬株式会社：安定性に関する資料(社内資料)

## 【文献請求先】

主要文献に記載の社内資料につきましても下記にご請求下さ  
い。

アルフレッサ ファーマ株式会社 学術情報部  
〒540-8575 大阪市中央区石町二丁目2番9号  
TEL 06-6941-0306 FAX 06-6943-8212

**alfresa**

販売元 アルフレッサ ファーマ株式会社  
大阪市中央区石町二丁目2番9号

製 造 大興製薬株式会社  
販売元 埼玉県川越市下赤坂560番地1